

第1章 校則が信頼を分断するなら、なくしてしまえ

そんなのウソだ

宝上 私は何で西郷先生のところに行きたいと思ったかを思い出したんですよ。スクールカウンセラーとしての悩みももちろんあったんですけど、自分が出産までの5年間の教員生活で何に苦労したかというところ、いかにして子どもたちに校則を守らせるかで試行錯誤してヘトヘトになったんです。本当に上手いかわなくて泣いたこともあります。

ところが、その校則をなくした公立の中学校があると聞いて、まず、「ウソだ！」と思っただけです。そんなのなくして上手くいくの？ って。絶対、桜丘中学校に行つてこの目で見て確かめたい。校則なしで学校や教室が運営できるんだつたらそうしたいって。

西郷 僕の学校を見学に来た人は、みんな宝上さんと同じように思つて来たんじゃないかな。まず、みなさん、僕が途轍とてもなく温厚な聖人君子のように思つているかもしれないけど、そうじゃない。今日の対談のために新大阪行きの新幹線に乗る前、東京で有名なハンバーグ屋のテイクアウトを買おうと思つて「これをください」つて言つたら、20歳ぐらいのアルバイトの子が「3種類あるんです」つて言うんだよ。「では、これをください」と指したら、「指で指しても分かりません」と言われてしまった。確かに彼女の立っている場所からだとな僕の指は死角になつて見にくいからね。でも、それは買い手の僕の問題ではなくて指先が見えない位置に立っている売り手の問題でしょう。だから「指で指しても分かりません」て、言い方に腹立つてさ、「結構です」つてもう買わないで来ちゃつた。それでお昼を食べ損なつた。そんな僕です。人間性が鍛えられていないので、まだまだ修行が足りません（笑）。

宝上 じゃあ、空腹で移動が長くて今は機嫌が悪いですか。

西郷 いえ、僕は大のタイガースファンだから、甲子園が近い大阪に来られることがうれしい。本当は来る前に、阪神百貨店のグッズ売り場に寄りたかつたんだけどさ。今日は時間がない。明日寄つて帰る（笑）。

ところで、宝上さんの教員生活のスタートはどんな感じだったの。

宝上 採用試験を大阪市で受けたんですが、最終面接で面接官の方が3人ぐらい並んでいて、「あなた、心理学を学んだとか、大学院を出ているとか書いているけど、何かそれが教室で役に立つと思うの？ 大阪市で教師をするのは大変ですよ、あなたできるんですか？」と聞かれたんです。

西郷 何も知らないお嬢様だと思ったのでしよう。今なら、圧迫面接ですね。

宝上 そうです。受かりたいし、ポジティブなことを言わなくちゃいけないと思って、心理学と英語の専門性というのをその面接の対策で売りにしていたんで、「厳しい地域での赴任は望むところです」みたいなことを言っちゃったんですよ。そうしたら、合格して、「あなたの学校は大正西中学校っていうところですよ」と電話がかかってきました。赴任に際して最寄駅を教えてくださいましたのですが、何か聞いたことない駅名だったんですよ。行ってみたら、生徒指導困難校で、家からはものすごく遠いし、大正区もあんまり知らなかったののでデーパーなところにやって来たなっていう感じでした。最初は正門が分からなくて、裏門のところで先生たちが、かたまってたばこを吸っていて、「こっちですよ」みたいな感じで行って行ったんです。

西郷 それは春休みだね。

宝上 そうですね。たぶん3月の末ですね。中学2年生に配属が決まって副担任になりました。

それで最初の学年集会の時に、先生方が「きちんと整列するということや規律を守るということの重要性」を口調や態度、もちろん話の内容からも発信されていて、あ、集会ってこういうものなんだと。それで、教師はこうやって生徒を厳しく叱れるのが大事なんだと、何かその時はそう思ったんです。規律や校則のことなんか、採用試験の時にはさらさら思っていないなかったはずなんですけど、いざ働き出した時に、何か生徒になめられちゃいけないってすごく潜在意識で感じるようになったんです。なので、教師同士でお互いにかわす言葉も、さすがに「なめられるな」とは言わないのですが、子どもたちに「乗り越えられちゃいけない」とか「あの先生は乗り越えられている」とか言うんですね。それがとても印象的でした。

西郷 まあそれはあるよね。あるあるだよ。僕にもそういう経験あるよ。

宝上 1年目は副担任だったから、子どもたちといい距離だったんですよ。担任の先生がいる中で、やさぐれている子とかがいた時に、副担任の立場から「どうしたの？」と話を聞いたりとかできた。それで2年目に中3の担任になったんですよ。

西郷 あー、2年目で中3の担任になった？

宝上 そうなんですよ。

西郷 それは宝上さんが校長や他の教員から認められたんだよ。新規採用2年目からそうやって突然3年の担任しなさいって言われるのは、普通ないからね。結構認められていたね。

宝上 だけど、その2年目が教師の5年間で一番何か上手くいかなかったんです。なめられちゃいけない、生徒に規律を守らせなきゃいけない、というその思いが強かったんですね。ところが、私の気持ちとは裏腹に総スカンになったんですよ。円形脱毛症にもなつて途中から毎朝、学校に行きたくないと思うようになったのが2年目だったんです。

まず先生、さっきの乗り越えるとか、なめられるとか、生徒と先生の関係においてその点はどう思われます？

西郷 いや、僕も最初はそうだったよ。最初は養護学校だったんだけど、次に大田区の一番荒れた学校に行った時に同じことを考えた。やっぱり厳しい先生が大きな声で指導しているのを見て、「ああ、ああやって生徒指導をやるんだ」と思った。悪さをする子どもとかがたくさんいてさ、これ、なめられちゃいけないって僕も思った。

ただどこからのやり方が違った。僕は生まれつき「あまのじゃく」などころがあつて、みんながやっていることと同じことはしたくないの。みんなと同じことをするっていうことは、何か自分という個性が必要ないような気がしちゃう。だから、みんながきちんとしてやせようとしているのなら、僕はそうじゃなくて、子どもたちをもっと自由にさせてあげようという発想になっちゃうんです（笑）。それで結果的にクラス運営も上手くいった。

生徒に乗り越えられない（＝なめられない）先生になること

宝上 やんちゃな子どもたちが多かった大正西中学校で5年間勤務し続けることができたのは、紛れもなく、当時の学年主任や学年の先生方のおかげなんです。悩んだ時には話を聞いてもらったし、叱咤しつた激励してもらいました。だからこそ、学年の先生たちのようになりたいと思つたし、見よう見まねで背中を追いかけていた部分もありました。

毎週のように飲み連れて行つてもらう中で、「しつだけだから最初が肝心で、中1でしつかり叱つておけば、2年生で中だるみになつても、まだこちらの言うことを聞くし、信頼関係と合わせてもそのくらいがちょうどいい」といった話が出たことがあつたんです。

先生たちを慕っていたし、その言葉も当時の私には腑ふに落ちました。

ただ、初めての担任は中3で、子どもたちは私より学校のことをよく知っていて、何かを指導したり強制しようとするたびに反発の嵐でした。全然上手くいきませんでした。

今言われた、他の先生はガンガン叱ってきっちり守らせようとするけど、自分はそうじゃないやり方にしようって思ったきっかけは何だったんでしょう。

西郷 僕はそれで他の先生方がみんな失敗した例を見ていたんだよ。ガツンと叱って締めつけば、1年の時は身体からだもまだ小さいし、言うことは聞くさ。だけど2年になると、だんだん乱れてくる。別に乱れてもいいんだけどね。そして3年になると、もう先生の言うことは聞きませんと。それを見てきているから、違うやり方をしなきゃダメだと思っただ。

ところが、同じように力で抑えていても、3年になったらパーンってはじけちゃうのを何年も見てきているはずの先生が、また1年生を受け持つと同じことをやっているんだよね。学んでいない。だから僕は他の方法で、子どもたちを落ち着かせようと思った。

宝上 私が自分のクラスの子たちのことを本当に思っただけで注意をしていたかっというと、きちんとしているクラス、落ち着いているクラスの担任をしている力量のある先生だっと思

われたかったからだだったかなと今になると思うんです。

西郷 あのさ、宝上さんは同じ土俵で認められようっていうタイプなんだな。僕は同じ土俵に上がらないもん（笑）。同じ土俵で競争すれば、それは身体の屈強な男性の先生の方が有利だよな。

宝上 中途半端に葛藤もあったんですよ。私は本来、気は強くて、結構ヒステリックな性格だから、かっとなったら、力で押そうと思えば押せたんです。だけど、心のどこかでそんなことしちゃいけないとも思っていたんですよ。相手は人だし、子どもなのに、一方的に私の気持ちを押しつけるのはどうなのかと。それもすごく悩んでいました。

西郷 そうだろうね。

宝上 言動が自己一致していないから、それはたぶん子どももきつと気づいていて、中途半端な関わりになったんです。

でも、一方で、自分の気持ちを伝えるのは悪いことじゃないとも思うんです。

西郷 一つ質問していい？

宝上 はい。

西郷 何かさ、宝上さんが、「子ども」って言う時に漠然とクラス全体を指しているよう

に僕には聞こえるんだけど、一人ひとりみんな違うじゃない？ 40人のクラスの中でも、同じようなことをしてかしたのに、この子にはなぜか叱れないとか、結構叱っちゃう子とかいるでしょう？

宝上　います。

西郷　あるいは、すごい心配で、叱るところじゃない子とか、いるでしょう？

宝上　います。

西郷　そういう子の影響っていうのはない？ やっぱり子どもによって自分の関わりや態度がどうしても変わるじゃん。

宝上　変わります、変わります。私、特に2年目かな、完璧主義みたいところがあって、パーンって教室を突然飛び出て行っちゃう子がすごく気になって、どこかで執着しちゃったんですね。でも、よく考えたら、思春期だから、追いかければ追いかけるほど、うっとうしく思われたんでしょうね。なめられちゃいけないし、学習規律をちゃんと守れなきゃいけないって思い込んでいた時に、教科書を忘れた子が何人かいて、その中の一人が、ヘラヘラ笑ったような態度だったんですよ。「忘れ物したのに何がおかしいんだ」って言って、初級クラウンの辞書を投げつけたっていうことがありました。

西郷 典型的な「怖い」先生だね（笑）。

宝上 でも、私の子どもたちに対する思いというのは、絶対に伝わるってどこかで考えていたんです。その子はやんちゃだけど、私が中2の副担任をしていた時にはすごく上手くコミュニケーションが取れていた女の子だったんです。英語の教師として関わるといふ部分では、その子がノートにいろいろと書いてきてくれて、私もその子に返事を書いたりとかして、心の声を聞かせてくれるような関係性だった。だからこそ、2年目は担任を持ちたいとすごく思ったんです。

それで3年生で再会するんですけど、上手いかなかった。すごく反省したのが、まずやっぱりルールを守らせなきゃいけないっていう思いがすごくあるから、制服のスカートやカバンのサイズなんかのささいなルールを言いついで、本当の彼女が伝えてくれたことが聞けなくなりました。大正西中学校のしんどい子たちが、思春期で校則に縛られてふつつつとしている気持ちに思いを及ぼせることができなくて、どんどん反抗されていったんです。

そこで、その時に私が良くなかったのが、自分だけで言うことを聞かせられないから、おうちの人に力を借りに行ったんです。特殊な家庭で、土足で家が上がって生活するんだ

と聞いたこともあったけど、大人のケアが行き届いていないそんな家庭でした。親はお父さんだけで、そのお父さんもあんまり家に帰って来ない。お兄ちゃんがいて、弟がいて、近くに住んでいる親戚の方がその子たちの面倒を見ていた。

西郷 複雑な家庭なんだ。

宝上 はい。今思えば、その子は親戚の方の前ではすごく、いい子を演じていたんですよ。その子はどこかで、この人に見捨てられたら終わりだと思っていたから、そういう振る舞いをしていたんです。でも、私は自分の言うことを聞いて欲しいから、その方の協力を求めたんです。その子に注意してくれた。それが大失敗だった。その子はその人の言うことは唯一聞いていたんですよ。だけど、それからもう誰の言うことも聞かなくなっただし、もちろん私の注意は耳に入らない。家の環境とかもあって、その子は児童相談所に一時保護されたりして、結局、思いだけを押しつける私の考えが良くなかった。

西郷 その子に対する「思い」が強すぎて上手くいかなかったっていうことだね、要はね。
宝上 上手くいかなかった。私の思いを伝えれば伝えるほど、その子からしたら、今までされたこともないような関わりを押しつけられた感じだったんですね。そこまで他人から自分に踏み込まれたことがないのに、私はその子に「勉強も教えたい、もっと関わりた

い」っていう思いがあつて、それが負担になつて拒否されて上手くいかなかつたんですよ。西郷 その「その子に関わりたい」という気持ち自体はいいこと、すばらしいことじゃないですか。

西郷 宝上さんは、本当にその子に愛情を持つて接していたんだね。それで、その子も最初は宝上さんに優しくしてもらへることがうれしくて、その愛情に一生懸命に伝えていたんだと思うよ、2年生の副担任の時はね。でも、3年生になつて担任の宝上さんにもっと心を開こうと思つていたら、彼女の気持ちや家庭環境のことも知らずに、他の子と同じようにつまらない校則のことがばかりを押しつけられたから、なあんだ、他の先生と同じだよ。愛情なんかなかつたんだつて、ぐさつと亀裂が入っちゃつたんだな。

宝上 中2の時はお姉さんの存在で寄り添いやすかつたんだと思うんですよ。他にも仲が良かったのに中3になつてから、ものすごく反抗された子がいました。その子は学級委員とかして求心力があるタイプの女の子だったんですよ。

西郷 別の女の子ね。

宝上 できればその子とは上手くやり続けたかった。好きな先生の科目は興味を持つてくれるじゃないですか。自分で言うのも何ですけど、彼女は中2の時は、私の英語の授業も

頑張ってくれていて、授業を引っぱってくれるクラスの中心メンバーだったんです。ただ髪のを休みのたびに真っ金々にしてくるから、黒くしろ、黒くしろ、とまずその攻防が始まって、さらに制服もアレンジして、胸元はだけて来たりして、それはダメだという指導で一気に反抗されて信頼も何も飛んでしまった。

西郷 校則を守らせることが何より前提になってしまって、せっかくそれまで築いてきた関係性が崩れてしまった。そもそも何で校則は大事なのかという問いにおそらく誰も答えられていなかったんだろね。かつての桜丘中学校もそうだったけど、荒れている学校はそれを締めなければならぬと考えるから、余計に厳しい校則を課すんだ。僕はそれでは上手くいかない例をたくさん見て来たから、逆をやった。

宝上 同じ学校文化というものを体感している中で、西郷先生は「人と同じは嫌だ、同じ失敗は繰り返さない、同じ土俵にも立たない」という考えで実行された。一方、私は「同じ方向性に従って、その中で認められたい。そもそも学校の先生方の方法論を信じて疑わなかった」。これは個人の性格に回帰してしまえば、そこまでののですが、私が「どこかに正解がある」と思い込んでいたり、「教えを信じて疑わない」ところがあったり、厳しい言い方をすれば、「固定概念や慣習に対して、自分で考えることができている」結果

だったかなと思います。そして、それはきつと私だけではなく、当時も、現在も、「信じて疑わない精神」がどこかで刷り込まれていて、「教育は洗脳」とさえ言われる要因も、一つそこにあるのかなと思います。

とはいえ、全く同じような時代と環境でも懐疑的に物事を見る人もいるので、あらためて「自分で考える」ことをもっと教育では重視した方がいいんだらうなと思います。今と違っての気づきですが。

そして、やはりカウンセラーとしての体験も大きいかもしれません。何人もの「生きること」に苦しんだり戸惑ったりする子どもたちやその保護者の方と関わる中で、校則や規則を守るなんてことは正直どうでもよくて、その議論すら陳腐で、そんなことよりも「どう生きるか」「どうその子らしく生きられるか」の方がよほど大切なことだと、子どもたちの切実な語りで気づかせてもらったんです。教師としての立場だけなら、私の場合は気づくことが難しかったかもしれませんが。そして、「どう生きるか」「あなたの強みや得意、大切にしているものは何？」を一緒に考えることで、その子が本来持つ力で、苦しくても生き続ける姿に、本当に勇氣と希望をもらいました。

西郷 宝上さんの言う「それはきつと私だけではなく、当時も、現在も、『信じて疑わな

『精神』がどこかで刷り込まれていて」というのは、いわゆる「マインドセット」といって、固定された考え方や物事の見方なのですが、これこそが学校や社会が変わっていかない一番の原因だと思う。